

## 宮野真生子

## 『言葉に出会う現在』

初版、ナカニシヤ出版、2022年、310頁、3000円

## 織田 和明

本書は2019年に逝去された宮野真生子さんの遺した文章のなかから、これまでの2冊の単著に収録されていなかった論文11本、書評5本、エッセイ6本を編者の奥田太郎さんがまとめたものである。宮野さんの著作は既に多くの読者を得ているので、私が改めて何かを述べる必要もないだろうが、九鬼周造の哲学を専門とするものとして、宮野さんの九鬼周造の哲学への愛を紹介しておきたい。

たとえ九鬼の名前が出てこないものであっても、宮野さんのテキストには九鬼の哲学を研究した成果が確かに息づいている。本書冒頭に置かれたエッセイ「恋とはどういうものかしら?」を見てみよう。このエッセイはお酒を飲みながら学生さんの恋バナを楽しそうに聞く宮野さんの描写から始まって次第に「恋」とは何かという問いが「出会いとかけひき」を中心に深められていく。宮野さんがピックアップするのは酒場で出会った二人が「自分」だけを手札に会話する場面である。

酒場での会話には、本音がぼろりと漏れることがあるし、そんなとき意図せず人は無防備な状態になってしまう。そういう無防備な状態で、「すぐわかります」などと理

解を示されてしまったりすると、思わず「おっ」となってしまうことがある。(5頁)

これを宮野さんは自分の弱いところやプライベートな感覚を思わず晒してしまった瞬間に「スルリと入って来る人」がいて、その時に人は驚き、心を動かしてしまうことがあるのだと言い換える。「その動いた、という感覚」あるいは「その驚きや動揺」が日常に開ける小さな風穴から吹く風のもたらす「何かが始まる予兆」に宮野さんは目を向ける。そして恋は日常に覆い隠された本当の自分を引き出し、それに触れてもらいたいという自己破壊的な願望かもしれないとまとめる(6頁)。

九鬼のテキストに触れたことのある人であれば宮野さんが散りばめる「出会い」や「驚き」といった言葉がまさに九鬼の思想のキーワードであったことに気がつくはずだ。もう少し読みこんだ人であれば「スルリ」という表現に注目するだろう。九鬼は「哲学私見」において偶然性の誕生を「離接肢の一つが現実性へするりと滑ってくる推移のスピード」と表現する<sup>1</sup>。可能性の現実性への滑り込みをス音の反復で表現することは九鬼のお気に入りであり、『偶然性の問題』や「音と句——偶

然性の音と可能性の匂」にも見られる<sup>2</sup>。そして九鬼の哲学に関する研究論文まで読んだ人であれば松本直樹さんの「運動の享受：九鬼周造『「いき」の構造』における恋愛論」（松本 2009）——宮野さんの論文も参照されている——を思い出すかもしれない。松本さんは漫画家・谷川史子さんの作品「プリズム」から、高校3年生の少女が、好意をよせる教師の男性が自分のことを「今ちょっとだけ私を好き」になっていることに気がついて驚く場面をピックアップして、「いき」を恋愛的な対人関係における感性的な「運動の享受」として論じる。宮野さんも松本さんも恋愛論の核とするものは一致している。相手に寄せる感情の微妙な変化とそれへの気づきもたらす関係の微妙な揺らぎ、そしてそれが垣間見せる可能性の現実への滑り込みに対する驚きだ。そして松本さんは、「プリズム」において少女が相手の微妙な心境の変化に気づいた瞬間を頂点に関係が本当に終わることを踏まえて、媚態の「成仏」を述べる。これは宮野さんとは対照的な見解だ。松本さんは恋愛から身を引いて自己を保つ瞬間を例示するが、宮野さんは『偶然性の問題』により強く肩入れすることで日常に開いた小さな風穴がもたらす自己破壊に九鬼の哲学の恋愛論的展開を見て取

る。宮野さんの議論をより詳細に読みたい方は本書に収録されたいくつもの恋愛論、そして代表作である『なぜ、私たちは恋をして生きるのか——「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史』（宮野 2014）へと読み進めていただきたい。正直に言うとその『「いき」の構造』と『偶然性の問題』を簡単に連続させるスタンスなど、九鬼の哲学の研究としては疑問を抱かざるを得ない部分も多い。しかし束縛から解放された両者が自由で対等な立場で取り結ぶ恋愛という切実な主張に貫かれた宮野さんの恋愛論は力強く私たちを励ますものだ。

「恋を分析するなんて、色気のカケラもない野暮の極みだが、こういうことを言語化したいと思うのが哲学をやる者のいけないところだ」（4頁）——この言葉自体も『「いき」の構造』の「そうして、意味体験と概念的認識との間に不可通約的な不尽性の存することを明らかに意識しつつ、しかもなお論理的言表の現勢化を「課題」として「無窮」に追跡するところに、まさに学の意義は存するのである<sup>3</sup>」を引き受けるものである——と述べているが、宮野さんは鮮やかに私たちの日常（に潜む風穴）を言葉へとつなぎ、私たちの目を見開かせてくれる。宮野さんは九鬼の哲学を宮野さんなりに体得し、そして

九鬼のテキストを読んだことのない人にも違和感なく届くように隅々まで整えて私たちに送りだしている。一見するとあまりに抽象的な九鬼の偶然性論が具体的な現実の出来事を生き生きと描き出す強力なツールとして機能すると示したことは宮野さんの功績の一つである。そしてもちろん、宮野さんはただの九鬼の哲学の宣教者に留まったのではない。九鬼の哲学を援用しながら、私を「私」から解放して他者へとつながる自由な言葉へと誘い、自由な個人がやわらかくかりそめの関係を取り結ぶ共同体の形成という宮野さん自身の大きなビジョンを見せてくれた。それは九鬼が希求した「いき」な関係と「遇うて空しく過ぐる勿れ<sup>4</sup>」を掲げてかけがえのない偶然の邂逅を愛する偶然性論とを宮野さんなりに解釈し、日常の実践へと広げていく営みである。

宮野さんの九鬼の哲学への愛を紹介するという本書評のミッションはこの冒頭エッセイの紹介と解説だけで十分に達成したはずだ。本書の第一章以降も、柳宗悦・宗理、田辺元、平塚らいてう、マンガ『深夜食堂』、そして九鬼の「いき」論、押韻論、永遠回帰論などについての興味深い論考が収録されている。特に宮野さんがとうとう九鬼の永遠回帰論を論じた「言葉に出会う現在——永遠の本質を開

放する」は、私にとって待望の論考であった。宮野さんが九鬼の永遠回帰論を論じた文章はこれと最晩年の『急に具合が悪くなる』だけである。

宮野さんに与えられた時間は「いき」論と偶然性論と永遠回帰論を総合して九鬼の哲学の全体像を描くにはあまりに短かった。宮野さんが九鬼研究で大著を完成させ、私はそれを乗り越えることを目標に研究に取り組んでいる宇宙に生きてみたかったと思う。私は宮野さんがあまりにも早く死と邂逅してしまったこの宇宙の運命を、おそらく宮野さんよりも九鬼よりもはるかにずっと、愛することができないでいる。

## 注

- 1 九鬼周造『九鬼周造全集』（岩波書店）1981年、第3巻、120頁。
- 2 九鬼周造『九鬼周造全集』（岩波書店）1980年、第2巻、206頁。  
九鬼周造『九鬼周造全集』（岩波書店）1981年、第5巻、167頁。
- 3 九鬼周造『九鬼周造全集』（岩波書店）1981年、第1巻、75頁。
- 4 九鬼周造『九鬼周造全集』（岩波書店）1980年、第2巻、260頁。

---

## 参考文献

九鬼周造

1980-1981 『九鬼周造全集』東京:岩波書店。

松本直樹

2009 「運動の享受: 九鬼周造『いき』の構造』における恋愛論』『宗教学研究室紀要』6:24-53

宮野真生子

2014 『なぜ、私たちは恋をして生きるのか——「出会い」と「恋愛」の近代日本精神史』京都:ナカニシヤ出版。

九鬼周造のテキストは、引用に際して旧字体は新字体に、旧仮名づかいは現代仮名づかいにあらためた。